

# 女神誕生

岩  
澤  
潤  
一  
郎

## プロローグ

「縄文海進」と呼ばれる海面上昇現象が終息を迎える頃、日本列島は、現在の日本の原風景とも呼ばれるべき風土が形成され、東北地方の内陸部は、広大な落葉広葉樹林帯となっていた。そこに住む人々は、それまでの、大型の野生動物の狩猟を中心とした移動生活から、豊かな森林の植物採取を中心とする定住生活へと移行し、小さな集落がいくつも作られ、多彩な文化が花開いていた。

これはそんな時代の、とある小さな集落で、人々から女神と崇められるようになった、一人の若い娘の物語である。

### 一 女児誕生前夜

その小さな集落は、低い山の連なる広大な丘陵地の東側の裾に、背後の山に抱かれるように位置していた。集落のすぐ下を、水量豊かな川が陽の昇る方から沈む方へと流れていたが、その流れの始まりも流れ着く先も、集落の人々は知らない。

集落を抱えている山はまた、その奥の山々に連なっていて、どの山も、ナラ、カシ、クヌギ、

クリ、ブナなどの広葉樹に混じり、杉、松などの針葉樹が生い茂る豊かな森となっていた。

森には山菜と呼ばれる植物が豊富だったから、集落の人々は雪が溶けると山に入った。春から初夏にかけては、コゴミ、タラの芽、ウルイ、フキ、ゼンマイ、ワラビなどが採れた。春は里から高い山へと上るから、低い山から高い山へと採取場所を変えることで、人々は長い期間、これらの山菜の恩恵に浴することが出来た。

森では、秋になると、木の実が採れた。クリ、トチの実、ドングリ、クルミ、アケビ、山ブドウ、などである。シメジ、ハツタケ、アミタケ、キクラゲ、マイタケなど、キノコも豊富だった。

秋も終わりに近づく、人々は、ヤマイモやユリの根などを掘った。秋は春とは逆に高い山から下りてくる。人々はまず高い山に入り、次第に低い山にと場所を変える。森でのこうした採取は、雪が山を覆うまで続けられた。

この豊かな森にはまた、多くの動物が棲息していた。フクロウやキジ、ヤマドリ、タカなどの鳥類に加え、リス、ウサギ、キツネ、オオカミ、シカ、イノシシなどの哺乳類もいて、その頂点にはクマがいた。

集落のすぐ下を流れている川には、多くの魚が棲んでいた。ヤマメやイワナである。初夏には、下流からアユが上ってきた。沢ガニもいた。

岸辺の木々の葉が色づく頃になると、下流からサケが産卵のために遡上して来る。サケはそれ自体が貴重な食料になるばかりでなく、クマがそれを狙って川岸に降りてくるから、そうしたクマを狩る機会に巡り会えるという意味で、二重の価値を持っていた。

川はまた、ドングリやトチの実などのアクを抜くのにも、欠かせなかった。あく抜きは、流水に曝すのが一番だったからである。

集落には六戸の住居があり、三十人弱の大人と子供が暮らしていた。どの住居もほぼ同じ大きさで、作りも同じであった。

住居は雨水が溜まらないよう緩やかな斜面に建てられ、その周囲には、雨水が内部に入るのを防ぐ溝が掘られていた。

集落にはまた、そのほほ中央部に、大きな集会所と、同じくらいの大きさの食料を蓄えておく倉庫、それに共同の作業所があった。

集会所は成人、結婚、葬式などの儀式の他に、病氣快癒の祈りや、祭の宴の場として使われた。

倉庫には長い冬に備え、クリ、ドングリ、トチの実、ユリ根、ヤマイモ、茹でて乾燥させたゼンマイなどが保管され、屋根裏には、薫製にされたサケが吊り下げられていた。ヤマブドウやガマズミ、それにマタタビなどを発酵させた酒も、壺に入れられて保管されていた。

作業所は様々な物作りの場所として利用されたが、最も良く利用されるのは、植物採取の行われない冬だった。この時期、集落の女達は、夏の間に作っておいた、カジの木やコウゾの枝から作った布を衣服に仕上げたり、アカソやヤマオから取り出した糸を編んで編布おんぎんを作るなどした。更には、ヒスイやシカの角などを加工して耳飾りなどの装飾品を作り、フジやアケビ蔓つる、竹、アシなどを編んで籠を作った。男達は、弓、石槍、石斧、包丁、スコップなどの、武器や道具を作る。また竹を割って大きな籠を編んだり、蔓を編んで網を作った。床に敷くムシ口も編んだ。

こうした作業には、老人達も加わっていた。先人の知識、経験が生言葉でしか伝えられない時代、老人達の記憶している知識は、どの作業にも必要とされたからである。

老人達はまた、父親も母親も山に入っている間、幼い子供達の世話をする役割も果たしていた。子供達の世話をしながら、ゼンマイを茹でて干したり、ドングリやトチの実の殻を剥くなどの、手作業にも励んだ。

こうした老人達のなかで最年長の者が、男女の別なく、集落を代表する長オサになっていた。長は結婚や葬儀などの儀式を取り仕切るだけでなく、生活の様々な場面でその知識を生かし、指導的役割を果たしたが、それは支配とは程遠い性質のものであった。また、長になっても、住んでいる家も、身につける物も、食べる物も、それまでと変わることはなかった。

男は狩りで家を留守にすることが多いから、家はどの家も母親が中心だ。その家の一番上の子が女なら婿を、男なら嫁を迎えるのが慣習だったが、集落の男女が結婚することは、厳に禁じられていた。

男達は集団でシカ、イノシシ、クマなどを追い、狩りをしたが、射程距離が短く、殺傷力も弱い弓や、石槍、石斧などの武器しかなかったから、狩りの成功率は低かった。成功例の多くは、動物の群れを追って移動し、その群れの中で怪我や病気で弱った物を、石槍や石斧で仕留めるといったものだった。

獲物を追って長い距離を移動するのは肉体的に苦痛だし、危険でもあるから、狩りには、落とし穴が良く作られた。それぞれの動物の動きを観察し、通り道が分かると、そこに穴を掘り、先端を上にした石槍を底に突き立て、穴の周囲には細い枝を渡し、その上を木の葉や草で覆って、動物たちがそれと気付かないようにする。こうした落とし穴をいくつも作り、毎日見回るのが、これも効率が良いとは言えなかった。

このように狩りは不安定だったから、集落での食生活の中心は山菜や木の実などの植物が中心で、それに、アユとサケなどの魚が加わっていた。

狩りにも植物採集にも、それぞれその術に長けた者とそうでない者がいるが、得られた物は皆等しく分配されたから、集落には富める家も貧しい家もなかった。人々は皆、能力に応じて

働き、必要に応じて取っていたのである。

食料を手に入れることだけでなく、土器を作ったり、住居やその周囲の溝の補修などの作業も、全て協同行われたから、集落は一つの大きな家族でもあった。

この集落の近くにも大小様々の集落があり、集落間では、互いに交易が行われていた。東の集落とは塩、北とは槍の先や斧の刃になる黒曜石こくようせき、南とは装飾品になるヒスイなどを、この集落の、鹿の角、クリの実、ヤマイモ、サケなどと、それぞれと交換した。

こうした交易に向くのは、「成人式」を済ませた結婚前の若者達で、それが男女の出会いの場ともなっていた。結婚相手は、遠く離れている集落に住んでいる人間ほど、歓迎された。結婚を通じて集落間の関係が深まることで、交易もスムーズに行われ、いろいろな土地の物が手に入るようになるからである。

## 二 女兒誕生

ある初冬のこと、この集落に、一人の、周囲とは変わった女の子が生まれた。親はもとより、集落の誰と比べても体毛が少なく、肌の色が白かったのである。そのためか、この女の子はとも弱々しく見え、その冬を越せないだろうと思われた。集落では、普通に生まれた子供でも、

冬を三度越せるのは二人に一人いるかないかだったし、無事に成人式を迎えられるのは、三人に一人だったからである。

女の子の母親は、二年前にも男の子を産んでいたが、その子は最初の冬を越せなかった。せめて、春まではとの願いを込め、母親はこの女の子に、ハルと名付けた。

集落で、生まれたばかりの子供に名前を付けるのは異例のことだ。子供は、三度冬を越してから命名されるのが普通だったからである。

二人続けて子供を失うことになっては、子供ばかりでなく母親も可哀相だと思つた集落の長は、集会所に女の子とその両親を呼び、女の子が生き延びられるようにとの祈りを捧げた。長は、ハルと土偶を並べ、呪文を唱えた。女の子の霊を、土偶に移す呪文である。祈りが終わると、長はこの土偶を壊した。通常、土偶は、病氣快癒の祈りに使われる。土偶がその人間の代わりに壊される、つまり死ぬことで、病氣の人間が助かると信じられていたからである。この病氣快癒の祈りを、長は、ハルが無事に成長するようにとの祈りに代えたのである。

この長の祈りが通じたのか、ハルは、雪の冬を生き延びて春を迎え、次の冬も越すと、周囲の予想を裏切つてすくすく成長した。色は白く体毛は少ないままで、体は他の子供より痩せてはいたが、動きは活発で、言葉を覚えるのも早かった。

ハルの母親はその後二人の子供を産んだが、どちらも「普通」の子供だった。



三 不思議な子

生まれてから七度目の春から、ハルは母親について、集落の女達と、集落を囲んでいる低い山々に入るようになった。山菜採取のためである。集落の子供達は、こうして母親達と一緒に山に入ることで、自然にそれぞれの植物が生育している場所を覚え、採取の仕方を覚えるのである。初めての年、ハルは他の五人の子供と共に、山に入った。

近くても低くても、山に入るにはそれなりの危険が伴う。低い山の場合用心しなければならぬのは、冬眠から覚めたばかりの蛇だ。だから山に入るとき、女達は、フジ蔓で編んだ籠を背負ったうえ、細い木の杖を手にする。蛇の攻撃から身を守るためである。蛇は噛んだとき、齒から毒液を出す。棒で蛇を追えなかった場合でも、その棒を蛇に噛ませることで、毒液を出させてしまうのである。ハルも小さい籠を背負い、自分の背よりも長い棒を手に、母親について山道を登った。

コゴミ、タラの芽、フキ、ウルイ、ゼンマイ、ワラビ、シドケ、ミズ、ウドなど、初夏まで、場所や対象を変えての採取は続くが、ハルは採取した物が何であれ、その場所を正確に記憶していて、大人達を驚かせた。一度入った場所に行っても、得られる物は少ないからである。こ

うしたハルだから、帰り道に迷うこともなく、いつしか道の先頭にはハルが立つようになった。またちいさいのに。

大人達はこう感心した。

山菜採取の合間に、ハルはシラネアオイなどの大型の花を見つけると、摘んで髪に飾った。

他の子供達もそれを真似たが、何かにつけ、ハルは目聡く、また美しい物に憧れる気質だった。

次第に気温が高くなり、近くの低山帯では山菜が成長しすぎて固くなるようになると、大人達は遠くの高い山に入る。子供の体力では無理だから、ハルは他の子供達と共に集落に残り、川で魚や沢ガニ、イモリなどを追ひ、川岸に生えているスイバを嚼んで渴きを癒し、川を泳いで横切ろうとする蛇に石を投げつけ、木の葉を流してどちらが早いかを競うなどして、一日を過ごすようになった。

一緒に遊ぶ子供達のなかに、イトと呼ばれる男の子がいた。イトはハルが生まれた年の春に生まれていたが、足が速く、竹槍で魚を突き刺すのが得意な男の子だった。

ハルは、このイトと一緒に遊ぶのが大好きだった。

特にお気に入りであったのは、結婚式の真似である。ハルはフジの花で首飾りを作り、あるいはツツジの花を髪に飾るなどして、花嫁に扮する。イトはフジの蔓やアケビの蔓を頭に巻き付けて、花婿になる。他の子供達は、イタドリの葉にヘビイチゴの実などを載せ、二人の結婚を

祝福する集落の人々を演じる。

しかし、ハルもイトも、そして他の子供達も、二人が結婚できないことは知っていた。幼い頃から、子守役の老人達から、同じ集落の相手とは結婚できないという掟を、何度も聞かされていたからである。

どうしてだめなの？

めのみえないこや、あるけないこ、くちのきけないこなどがうまれるからさ。

子供達の間、老人達はこう答えていた。小さな集落は、血縁集団である。近親間の結婚が優れた子孫を残すのに適さないことを、集落の人々はいつの頃からか経験的に学び、それが受け継がれ、掟となったのだった。

イト達と川での遊びを繰り返すうち、ある日、ハルは奇妙な物を作り出した。フジの蔓を編み、細長い円筒形の筒を作ったのである。筒は先端部ほど細くなっていて、そこに杉の葉を詰め、石をひっくり返して捕まえた川虫を入れた。

ハル、それ、なに？

イトが聞く。

魚トのねるところ。

トトもねるか？

ねる。

こんな会話をイトや他の子供達と交わし、ハルはその円筒形の筒に傍らの石を少し詰め、濼みに沈めた。

翌朝、日の出と共にハルは川に行き、沈めてあった筒から石を取り出して持ち上げると、筒の底、杉の葉を詰めたところに、ハヤが二匹入っていた。筒の先端部に入り込むと、後ろに泳げない魚は、簡単には抜け出せない。ハルは川遊びをしながら魚の動きを観察し、その習性を知ったのだ。

ハルが魚を捕まえて戻ったのを見て、子供達は驚いた。

朝食を済ませて川遊びを始めると、子供達は、ハルを真似て同じような筒を編み、それぞれ思い思いの濼みに沈めた。

こうしてハルの集落では、子供達が、フジやアケビの蔓で編んだ筒で、川魚を捕る事を覚え、た。筒の中に魚が入っていないこともあつたし、筒を引き揚げる際に逃げられてしまうこともあつたが、それまでのように素手で追い込んで捕まえたり、細い竹槍で突いて捕まえるよりは、はるかに効率的だつた。

子供達の捕まえた魚は、食事に彩りを添えた。子供の遊びとはいえ、生業と不可分だつたのである。

太陽が中天まで上るようになると、集落では、アユ漁が始まる。男達は水量の少ない時期を見計らい、川岸に沿うように川の中に棒杭をうち、その周囲に石を積み重ね、細く、流れの速い、アユの上る水路を作り出す。アユは急流を好むからである。この細い水路の先には、男達が仕掛けた網が待ち受けている。アユの姿が見かけられるようになると、集落の人々は、アユが少しでも多くこの水路に入るように、水路の入り口近くまでアユを追い込む。こうしたアユ漁は、梅雨に入ってから川が増水するまで続けられる。

梅雨に入ってから間もなくのことだった。いつものように大人達がアユを追い込むのを川岸で見ているハルは、川のはるか上流で、「どーん」という、それまでに聞いたことのない大きな音を聞いた。

「どーん」というおとは、ちやいろのおおみずがながれてくるおとだ。

ハルは、いつか長に聞いた言葉を思い出した。ハルは隣にいたイトに音が聞こえたかと尋ねたが、イトは聞こえなかったと言う。イトは他の子供にも聞いたが、聞かれた子も首を振る。そうしている間に、ハルは川水の色が変わったのに気がついた。

おおみずだ！

ハルは大声で叫び、大人達が驚いて上流の方を見ると、茶色に濁った川が盛り上がり、迫っ

てくるように見えた。大人達は慌てて岸边にいた子供を抱え、集落への坂道を駆け上がった。その直後、川水が鬱々しゅうじゅうと音を立てて流れて来たが、人々はどうにか全員無事に、大水から逃れることが出来た。間一髪だった。

あめもふっていないのに。

人々は不思議がったが、ハルは上流のどこかで大雨が降ったのだと思った。ここも降るかも知れないと思い空を見上げると、川の上流の方から、真つ黒な雲が自分達の方に向かって進んでくるのが見えた。

あめだ。おおあめだ。

ハルが言い終わらないうちに雨はぽつりぽつりと降り出し、間もなく、本降りとなった。

不思議な子だ。

雨を予測したハルを大人達はこう思ったが、口にはしなかった。

梅雨が明けて川の水量が元に戻ると、女達は近くの山から、カジの木やコウゾの、まだ若い枝を切り取り、それを束ねて川水にさらして叩き、布を作る仕事に追われるようになった。水にさらした木の枝を、女達は河原の平らな石の上に置き、棒で叩く。柔らかくなった枝は丸められ、更に叩かれる。それをまた川水にさらすと、同じ作業が何度も繰り返され、やがて木の

繊維は延びて紙のようになる。これを乾かすと、布の完成だ。出来上がった布は作業所に運ばれ、外仕事のなくなる冬になると、それぞれが身につける衣服に仕立てられる。

女達はまた、背の高く延びたアカソやヤブマオを刈り取り、その皮を剥ぎ、数日川水にさらして残った皮を剥ぎ、内皮の繊維を取り出して紡ぎ、糸を作った。この糸もまた作業所に運ばれ、冬になると、編布にされるのだが、この糸は撚りをかけながら紡がなければならず、手先が器用でないと上手く出来ない。ハルは子供ながらにこの糸を器用に紡ぎ、大人達を驚かせた。

暑い夏が過ぎ、日脚が短くなり出すと、集落の人々は休む間もなく、動き回るようになった。冬の間、集落は雪に閉ざされる。その間の食料や薪を確保しなければならぬし、晴れる日の多いこの時期は、土器を作る適期でもあったからである。

山では、クリ、ドングリ、トチの実などの採集が行われ、ユリの根やヤマイモが掘られる。川では、海に戻る落ち鮎を網で捕まえる漁が行われ、それが終わると、今度は逆に、海から遡上してくるサケ漁が行われる。

こうした食料確保の間に、雷に撃たれたり、強風で倒された木を集めたり、細い木の枝を切るなどして、薪の確保が行われる。

更には、土器作りだ。貯蔵用の土器や皿、小鉢などはともかく、煮炊きに利用する土器は火

にかけられるから、数ヶ月しか持たない。大小合わせ、一軒の家で、一年に十数個の土器が必要となる。集落全体では八十近い数だ。それに、病氣快癒の祈りのための土偶も、作らなければならぬ。これは、家族の人数分だ。それを秋晴れの日が続く、乾燥に適したこの時期にまとめて作り、野焼きをして焼き締めるのである。

土器作りは、川に面した崖での、粘土採取から始まる。採取された粘土の塊はまず乾かされ、乾いたら木槌で碎き、木の根などの不純物を取り除く。これに砂を混ぜ、それを、水を少しづつ加えながら練り上げ、再度塊にする。この塊から適当な量の塊をちぎり取り、両手で揉んで、親指くらいの太さの「ひも」状に伸ばす。このひもをぐるぐる積み重ねて、壺の形を作る。壺の大きさはその用途に応じて様々だが、貯蔵用の物は、底が平らでずんぐりした形に作られる。一方、囲炉裏の灰にさして、食べ物の煮炊きに使う壺は、灰に挿しやすいように、先端部が少し尖っていて、背が高く、全体に熱が回るように、幅はさほど広くはない。更には、食べ物を載せる平らな皿や、汁物や酒を入れる小鉢も作られる。

形の出来上がったこれらの土器には、フジの蔓や松かさ、編んだ紐などを押しつけたり、クシで表面を引っ掻くなどして、思い思いの文様が施される。

土器や土偶を作るこの作業は、直射日光を避けて、作業所の中で行われる。粘土は、すぐに日光に当てると、ひび割れてしまうからである。出来上がった物は、作業所の中の、日の当た



らない場所で乾燥させられる。

作業所の中で十分乾燥させられた土器類は、作業所の外に運ばれ、日陰に置いて数日乾燥させられた後に日光に当てられ、最後に、広場で焼かれる。広場の中央に何十もの土器を並べ、その周囲を乾燥した木の枝で囲み、更に壺の上にも枝を載せて火を点け、半日ほど燃やし続けて、焼き締めるのである。途中で雨が降ると一大事だから、この焼き締めの日は、慎重に天候を判断して行われる。この判断を下すのも長の役目である。

その年の、焼き締めの日のことだった。前夜から空は晴れ上がっていて、早朝、東の空には、美しい朝焼けが見られた。長は今日が良いと言った。その言葉で、女達が、壺の周囲を木の枝で囲い始めた時である。

あめ、ふる。あめ、ふる。

ハルが大きな声で言った。

その言葉に、川水が急に増水した時のことを思い出した女達は空を見上げたが、雨を降らせる雲は、どこにも浮かんでいない。太陽もその輝きを増している。

こんなにおひさまびかびかなのに。やっぱり、こどもはこどもだね。

こう言いながら、女達は焼き締めの準備を続け、終わると、周囲に積んだ木の枝に火を点けた。

あめ、ふるのに。

涙を浮かべて母親にこう言うと、ハルは家の中に入ってしまった。

広場には、ほぼ円形の、火の輪ができていた。最初は燻<sup>くすぶ</sup>り、黒い煙を上げていた火は次第にその煙の色を薄くし、代わりに黄色の炎を上げ始めた。降り注いでいる太陽の光が、その火の色を薄くしている。

やがて、広場に集まった女達の目に、炎の色が赤く映りだした。周囲が暗くなったのである。驚いて空を見上げると、集落の上空は、一面黒雲で覆われていた。

女達は驚いたように顔を見合わせ、すると、雨が降り出した。雨脚はすぐに強くなり、それまで燃えさかっていた火は、音を立って消え、灰色の熱い煙が広場に充満した。

女達はハルの言葉を信じなかったことを悔い、母親は家の中にいたハルに詫びたが、土器作りは、日光乾燥からやり直さなければならなかった。

不思議な子というハルの評価は、この時に定まった。月から来た子供だという女もあれば、流れ星の生まれ変わりだと言い出す老人もいた。

四 ハルの畑

高い山から冬が下りてきた。遠くの山の頂上が白くなつたと思つてみると、山から吹き下ろす風が冷たくなり、人々は、それまで着ていたタパと呼ばれる衣類の上に、タヌキやキツネの毛皮で作つたチョッキを重ねて着るようになった。程なく、麓の集落にも雪が降りだした。

女達は作業所で、アカソなどから紡いだ糸で編布を作り、それを敷物に仕立て上げたり、蔓や割つた竹を編んでの籠や貯蔵袋作り、鹿の角や動物の歯を加工してのプレスレットやネックレスなどの装身具作りなど、それぞれ忙しく働く。ハルもそれらの女達に混じり、小さな耳飾りやペンダントなどを作つたが、ハルの作る物はどれも美しく精巧で大人達を感心させ、欲しがられた。

特に女達が欲しがつたのは、ハルの作るクシだった。ハルは作つたクシに何度も何度も根気よく漆を塗り重ね、黒地に朱色の模様を浮かび上がらせたり、逆に、朱色の地に黒い模様を浮かび上がらせたりと、きれいに漆を塗つたクシをいくつも作つた。

天候が荒れてなければ、男達は、狩りに出かける。雪の上に足跡が残るから、冬になると追跡は容易になるが、だからとて、狩りが容易になるわけではない。それでも、雪が深く積もつて歩くのが困難になるまで、野ウサギやキツネ、タヌキなどの小動物を狩り続ける。男達は捕

獲した動物を解体し、皮をなめして衣服の材料にしたり、脂肪を集めて漉し、油を作ったりした。

そんな冬の間、ハルには、仲良しのイトにも内緒で、密かに楽しみにしていたことがあった。雪が降る前に、イガから取り出したクリの実と、一片一片に剥がしたユリの根、それにヤマイモを小さく切り分けた物を、集落から川へ降りる坂道の脇の斜面に埋めて置いたのである。春になれば、それぞれから芽が出ているはずだ。それらが思い通りに育ってくれば、わざわざ遠くの山まで出かなくても、ある程度の食料は手に入る。蛇に噛まれたり、滑落して怪我をする危険性も減る。ハルはそれが楽しみだった。

ハルがこんな事を思いついたのは、その年の春の、母親達と一緒に山菜採取の時だった。地面から顔を出したばかりと思われるような、小さな木の芽があった。それに興味を持ったハルは、持っていた木の棒でその芽を掘り起こした。すると、根の部分に、茶色いクリの実が付いていた。

クリは実から生まれるのだ。

ハルはこう思った。

この実を地面に埋めておけば、やがて芽が出、それが成長して立派な実を付けるクリの木になるに違いない。

ゆり根の鱗片りんぺんを剥がしたのも、イモを小さく切り分けたのも、同様の類推からだった。

長い冬が過ぎた。雪の間から顔を覗かせている路みちの臺とうの採取から、山菜採取は始まる。ハルは毎日斜面を見ていた。コゴミが茎を伸ばし、タラの芽が脹らみ始めた頃、ハルは、ユリの芽が何本か出ているのを発見した。見つけたときは胸がどきどきしたが、ハルは誰にも言わなかった。やがてヤマイモの芽が、そしてクリの木の芽が、相次いで地面から顔を出したのを見て、ハルは初めて母親にこのことを話した。

斜面に顔を出したそれらの芽を見て、もっと広いところに移植しようと、長が言い、ヤマイモには蔓を這わせる支柱が必要だと付け加えた。

女達は総出で、それぞれの芽を移植し、ヤマイモの脇には、竹の支柱も立てた。クリは最も広く間隔を開け、ついで、ヤマイモ、そしてユリの順で間隔を取り、川に降りる道の東側の斜面が、「畑」となった。

やがて、イモの蔓が伸び、クリの木が大きくなると、人々はそこをハルの畑と呼ぶようになった。

秋になった。ハルの畑では、ヤマイモの蔓に付いたムカゴの収穫が行われた。ユリはまた細く短く、花を付けなかったから、そのまま掘り起こさないことにした。クリの木は、ハルの胸

くらいまで伸びたが、その年、花は咲かなかつた。

初雪が降つた日、女達は畑でヤマイモも掘つたが、ヤマイモはそれぞれ立派に生長していた。ヤマイモは平らな土地よりも、斜面の方が、深く根を伸ばすから、植えた場所がその生育に適していたのである。

ユリやクリと異なり、ヤマイモはすぐに収穫できることも分かつたから、集落の大人達は総出で、川へ降りる坂道の西側斜面の雑木類を引き抜き、小さく切つたヤマイモを植え、その脇に支柱を立てて、ヤマイモ畑を作つた。

それから冬が二度過ぎた。畑はどんどん広がつていき、それに伴い、女達の山に入る回数が少なくなつた。イモ、ユリの畑はどんどん収量が増え、クリ園も、初めて収穫できるようになつたからである。

これらはまた、集落の貴重な交易品となつた。水にさらして調理する必要のないヤマイモやユリ根、それにクリの実は重宝されていたからである。お陰で集落では、塩、黒曜石、それにヒスイなどに不自由しなくなり、その上、有り難いことに、遠くの山に行き来する回数が減つたから、時間の余裕が出来た。女達はその時間を、編布作りや布作りに充てる事が出来るようになった。土器作りにも余裕が出来、女達は、鳥の形を模した酒器や、蛇を模した持ち手の

付いた鉢などを作り、さらに、施す様々な文様も一段と精巧になっていった。

ハルのおかげだねえー。

女達はこう言いながら土器作りに励む。

うちにもハルのようなことがうまれないかしら。

こう呟く若い母親もいた。

## 五 成人式

集落では、子供が生まれると、白樺の枝を一本切り落とし、春を迎えるたびに、その皮を黒曜石のナイフで一筋剥いでいた。これでその子供の年齢が分かるのである。

こうして作られた筋が十二本になると、その年の冬、その子の成人となる儀式が行われる。

この儀式は上の前歯を一本抜くもので、この痛みに耐えられることが大人として認められるための条件だった。翌年、さらにもう一本の歯が抜かれ、前歯が左右対称に一本づつ抜かれることで、成人となる儀式は完了する。それまでの子供は、この成人となる儀式が終了すると一人前の大人として扱われ、結婚相手を探すことになる。

その年の冬、集落の集会所には、集落の全員が集まり、ハルとイトの成人式が行われた。集

会所の囲炉裏では、交易で手に入れた梅檀せんだんが焚かれ、中は良い香りが充滿している。長が短い祈りを捧げ、二人の健康を祈願した後、二人は並んで横たわり、長はそれぞれの歯を、黒曜石を研いで作ったナイフでえぐり取った。

痛かった。それまでに経験したことのない、激痛だ。

ハルはイトが側にいることを思い、イトはイトでハルが側にいるからと、二人とも涙は浮かべたが、苦痛の叫び声や呻うめき声を上げることもなく、二人の大人になる第一関門の儀式は無事終了した。

儀式が終わると、集会所では、二人の成人を祝い、盛大な祝宴が催された。成人式は、祭と並ぶ、集落の人々の楽しみのある場なのである。マタタビやヤマブドウで作られた酒が出され、サケやアユの薫製、トチの実をすり潰して作った団子、ゆり根の煮物、焼き栗などが大きな皿に盛られて出され、祝宴は、小さな子供が眠り込むまで続けられた。

この儀式が終了し、半分大人になったイトは、その冬から、大人達に混じり、狩りに出るようになった。獲物はウサギやキツネなどの小動物が主だったが、足の速いイトは、動物を追う勢せこ子として活躍した。大人よりも早く、イトは雪煙を巻き上げて、獲物を追う。

ある時、イトは、自分の槍で初めてウサギを捕まえた。その柔らかく温かい体を両手でしっかりと握りしめながら、イトはこの毛皮で、ハルに襟巻きを作ってやりたいと思った。首のす



らりと長いハルは、冬の間、首が寒くて大変だろうと思っていたからである。

しかし、イトの願いは叶わなかった。獲物は、仕留めたのが誰であれ、狩りに参加した全員に平等に分けられるのが決まりだからである。イトに分けられたのは、後ろ足一本分の肉だけであった。

## 六 求婚者達

暖かい春が訪れると、ハルの集落には、ハルとの結婚を望む男性が、あちこちの集落から訪れるようになった。背が高く、足が長く、すらりとした体型で体毛の薄いハルは、天気を予測する能力や、美しい物を作り出す器用さなどで、付近の集落はもとより、十キロも二十キロも離れた集落にまで、その存在が知られるようになっていたからである。

ハルは二番目の子供だったが、上が幼くして死亡したため、長女になっていた。従って婿取りである。

ある者は塩を携え、ある者は鹿の皮、またある者はヒスイと、それぞれ貴重な品を持参し、若い男達が、ハルとの結婚を申し込みに訪れる。

もう一冬待つてください。まだ半大人ですから。

ハルの母親はこう言つて、申し込みを丁重に断つていた。

一方、ハルは今度の冬を迎えるのが苦痛だった。冬が過ぎて春になれば、結婚しなければならぬ。塩の男も、鹿皮の男も、ヒスイの男も、格別嫌いに思つたわけではないが、その男達のことを考えるたびに、イトの顔が浮かぶ。

顔ばかりではない。

イトが竹槍でイワナを突く姿や、鹿を担いで山から下りてくる姿、手斧で木を切り倒す様子なども、次から次へと浮かぶのだ。

ハル、とイトが言う。

なあに？

なんでもない、とイトが答える。

イト、とハルが言う。

なあに？

なんでもない、とハルが答える。

子供の頃のこんな他愛ない会話も蘇り、ハルは溜息をつくことが多くなつた。最初の歯を抜いた後から、ハルとイトは、すれ違つても、言葉を交わすことが少なくなつていたからである。集落の掟のなせる業であつた。

一方、イトにも結婚話は持ち上がっていた。イトは長男だったから、嫁を迎える立場だ。イトは足が速く、動きが敏捷だから狩りにはうってつけで、その評判は、近くの集落に広まっていた。交易のためにイトがどこかの集落を訪れると、必ずその集落の若い娘が、耳飾りを着け、ペンダントを下げ、ブレスレットを巻いてと、着飾って姿を現す。しかし、イトには、どの娘も、集落の景色の一部にしか見えなかった。イトの目には、若い娘はハルしか映らないのだ。にもかかわらず、ハルとは、話をするこゝとすらままならない。イトは集落の掟を恨めしく思ったが、それを破ることは考えられなかった。

翌春、二人が完全な成人の仲間入りを果たすと、集落は一層賑わうようになった。ハルを求めて若い男が、イトを訪ねて若い娘が、頻繁に集落を訪れるようになったのである。集落の人々は、大人も子供も、二人がどんな相手と結婚するのか興味津々だったし、集落では、久しぶりに行われる結婚式に期待が高まった。

こうした周囲の期待とは逆に、ハルの気持ちは重かった。貴重な品を携えて集落を訪れる男達に恨めしく、イトを訪ねて来る若い娘達を羨ましいと思う。

この集落に生まれてきてさえないなければ。

何度そう思ったか数え切れないほどだ。そんな気持ちのせい、山菜採りに山に入っても、

それまで間違えたことのない道を間違えたり、前日入ったばかりの所にまた入ったりもした。

初夏になり、アユが遡上し始めると、川下の集落から、若い男が背負い籠一杯にアユを詰め、集落を訪れた。ハルに結婚を申し込むためである。ちょうどそのとき、川の上流にある集落から、磨いた黒曜石で作った手斧やスコップ、それに包丁などを携えて、若い男がこれもハルに結婚を申し込むために、集落を訪れていた。

鉢合わせになった二人は口論となり、互いに相手に掴みかかろうとした。その場は集落の長が収めたが、この出来事はハルを傷付けた。争いを好まないハルは、自分のせいで争いが起きたのを、悲しく思ったのである。

その夜、ハルは、イトと一緒に集落から逃げることを考えた。別の所のなら、二人は結婚できる。そう思ったのである。

そのとき、子供の頃に聞いた言葉が、呪文のように聞こえてきた。

めのみえないこや、あるけないこ、くちのきけないこなどがうまれるからさ。

そうなのだ。同じ集落の人間が結婚すると、良くない子供が生まれてくるのだ。何処に行こうと、二人が同じ集落の人間であることに変わりはない。イトとの結婚は諦めるしかないのだ。じゃ、誰と。

ハルは黒曜石の男や、鹿皮の男などを思い浮かべたが、その度に、男達の顔はイトの顔にかき消されてしまうのだった。

ハルはイトを抱き締めている思いで、自分の胸を抱き締めた。

そんな夜が何夜も続き、ハルは次第に痩せていった。それに伴い、集落を去ろうという思いが浮かび始めた。そうすれば、自分が原因で争いが起きることもない。離れば、イトを忘れることが出来るようになるかも知れない。幸い、川沿いには、誰も住まなくなった集落跡が点在している。住居は古くなっているが、雨露はしのげるだろう。そんな集落跡を渡り歩き、何処かへと辿り着く。その頃には自分のことは忘れられているだろうし、イトへの思いも、薄れているに違いない。

ハルのそんな思いは、やがて確信へと変わっていった。

## 七 祭

その年はハルもイトも結婚しないまま、秋の祭が近づいた。萩の花が咲き出して最初の満月の夜、その年のサケ漁の豊漁を祈り、集落では、盛大に祭が行われる。この祭はまた、その年に狩った獣、魚、それに引き抜いた山菜や掘り起こしたカタクリやウバユリの根などの霊を慰

め、翌年も、森や川の恵みが豊であることを祈る祭でもある。

集落の人々は、あらゆる物に霊が宿っていると考えていた。自分たちの手でその霊の宿り主は命を奪われるが、きちんと慰めればその霊は再生し、またこの世に戻ってきて自分たちに恵みを与えてくれると信じていたのである。祭はそのための、集落を上げての祈りであった。

月が丸みを帯びて行くにつれ、集会所の前に祭壇が作られ、薪が高く積み重ねられていった祭の準備である。

祭は、満月が東の山から顔を出すのに合わせて始められる。広場にうず高く積み上げられた薪に火が付けられると、長が、クリの実やユリ根、焼いたアユなどを献じた祭壇の前で祈りを捧げる。集まった人々は、長の後ろに座り、長の動きに合わせて、頭を下げたり、手を叩いたりする。

祈りが終わると、子供や若い女が踊りを披露する。男達は、棒で丸太を叩き、節を抜いた竹を吹き、あるいは、底の平らな土器の開口部に鹿皮を貼り付けた太鼓を叩きと、踊りの伴奏の音楽を奏でる。火が燃え尽きると人々は集会所に移り、大人は、壺に仕込んでおいた果実酒を飲み交わし、子供達は、クリの実の混じった、トチの実の粉を焼いて作ったクッキーを食べるのが習わしであった。

その年の祭は、いつになく盛大だった。他の集落からも、ハルとイトを目当てに、若い男女

が集まっていたからである。

長の祈りが終わると、赤や黄色の絵の具で顔に化粧を施した子供達が、小さい順に踊った。踊りは、魚や蟹などの川に棲む生き物や、蛇、ウサギ、鳥などの動きを真似たもので、見ている人々は、それが何の真似であるかが分かると、拍手し、賞賛の言葉をかける。

次に他の集落から来ていた三人の若い娘が踊った。娘達はイトに気に入られようと精一杯化粧を施し、着飾り、踊りを披露した。

最後にハルの番である。

集まった人々、とりわけ、他の集落から訪れていた若者達の歓声が、ひとときわ高くなる。

広場には、イトを始め集落の男達がそれぞれの「楽器」を手に座っていたが、その姿は、ハルに傳かたっているかのようにだった。

裾が広く、足を一本づつ包む形の、それまで人々が目にしたことのない、長い服を着たハルは、化粧も施さず、装身具を全く着けずに、広場の中央に進み出て、集まった人々に深々と頭を下げた。

大きな掛け声と共に、イトが太鼓を手で叩くと、ハルは静かに舞い始めた。その姿は、早春に咲き乱れるカタクリの花のようであった。動きは少しずつ速くなり、ハルは川を遡上するアユになったかと思うと、それを狙うカワセミになって宙に飛び上がり、静かに立ち止まってユ

りの花になり、林を駆け抜ける鹿になり、空を舞う夕力になり、風になり、雲になりと、ある時は激しく、ある時は静かに、優美に踊り続けた。人々は口を開け、ただただそんなハルの踊りに見とれた。

イトは両の手の皮が破けんばかりに、太鼓を叩いた。その太鼓がハルの踊りを盛り上げ、踊りがイトの太鼓演奏を盛り上げ、ハルとイトは、体は離れていたが、二人で踊り、あるいは二人で太鼓を叩いているかのようだった。

### エピソード

#### く女神誕生く

イトを含め、人々がハルを見たのは、その夜が最後だった。

踊りの後、集会所での宴会でたか酔った人々は、夜の間になにかあったのか全く知らずに眠り続け、翌朝、ハルの姿が何処にもないことに気が付いたのである。

衝撃が走った。

イトはそれまで交易で訪れたことのある集落を毎日捜し続けたが、ハルを見かけた人は何処にもいなかった。誰かに連れ去られたのだろうかと言う男もいれば、月に帰ったに違いないとい



う女もいたが、結局ハルの消息は分からないままだった。

程なく、土器を焼く時期となった。

イトは、心を込めて、いなくなったハルの人形ひとがたを作った。そうすることで、せめてハルの無事を祈ろうと考えたのである。

すらりとした体。長い足。それを包む裾の広い円筒形の布。細い腰と少し後ろに突き出たお尻。祭の夜のハルを、そのまま小さくしたような人形が出来た。仕上げに顔を作ろうとして、ハルの様々な表情が次々に脳裏に浮かび、どうしても一つの形に特定できなかつたから、イトは、その顎あごの細い、顔の輪郭だけを作った。頭の上に束ねた髪を載せ、形は完成した。

焼き上がったハルの人形を、イトは集落の集会所に置き、毎日、朝と夕、手を合わせ、その無事を祈った。

その姿を見て、集落の人々は、ハルのお陰で、イモ畑や、ユリ畑、それにクリ園を作ることが出来たことを思い出した。大水から救われたことも。

そうした感謝の気持ちから、集落の大人達は、イトの作ったハルの人形に手を合わせるようになった。大人達はまた子供達にハルの功績を話したから、やがて子供達も真似て手を合わせた。自分もハルのような技術や能力を身につけたいと思ったから、子供達はその願いも込め、

手を合わせたのである。

こうしてハルの人形は、集落の女神像となったのである。

（了）